

散歩道という現場

中島直人

「さんぽみち」と名付けられたこのコーナーで、本当に散歩道の話をしてみたい。人は皆、機会があれば広く世の中に紹介したいと思っているお気に入りの散歩道をそれぞれ持っているだろう。私の場合は、それは西武池袋線の石神井公園駅に始まり、石神井公園を抜けて南下し、西武新宿線、青梅街道を渡り、善福寺公園を経てJR中央線の西荻窪駅に至る全長数キロ、所要時間3時間くらいの散歩道である。遊歩道が整備されているわけではない、歩き通すには少々ハードな距離なのに途中省略のための路線バスもないこのルートを、年に一、二度は必ず歩いている。「何故、こんなルートを」と訝しく思われる方のために、この散歩道が縦断するまちには私にとって懐かしい故郷であるということを最初に告白しておく。私が2歳から10歳になるまでを過ごした家は善福寺池の傍らにあった。10歳の1年間は下石神井の社宅で暮らした。父親が勤務していた某企業のグラウンドやプールが石神井池の畔にあって、これらの自宅から何度も通った。私の原風景はこの散歩道沿いに展開する、ごく日常的な風景の集積である。記憶の中の確かな「自分」と出会える現場を紡ぐ道筋、私がこの散歩道を歩くのは、決まって「自分」を見つめ直したい時である。

さて、今度は「なんだ、若いくせに追憶の散歩道の紹介かい」と笑われてしまいそうである。違う、この散歩道を紹介するのは地域主導の都市アメニティ保全のルーツの一つがここにあるからなのだと言いつつ、この散歩道の見せ場は、豊かな水面と緑陰を湛え、憩いの場として存分に活用されている石神井公園と善福寺公園であろう。この両都立公園、ともに昭和30年代の開園であるが、実はそのずいぶん前から公園であった。どういうことか。歴史を紐解くと、昭和5年、石神井と善福寺の一带はその優れた「風致」(当時はアメニティの訳語でもあった)の保全のため、建設行為等に許可が必要となる風致地区に指定されている。この指定時に地元の地主たちは、池まわりの宅地開発を許さず、むしろ東京府に寄付、貸与することで風致の保全を図り、かつ一般市民に開放された公園的空間としての整備を推進した。更に彼らは各地区で風致協会という社団法人を結成し、風致の維持増進に資する環境整備、啓蒙活動を行った。例えば、石神井公園も善福寺公園もそれぞれ二つの池を持つが、ボートの浮かぶ石神井池、武蔵野の面影の濃い善福寺下池は、実は戦前期に風致協会の手で掘られた人造池である。自然の湧水池である三宝寺池、善福寺上池の隣に、それらと調和させる形で風致の保全と慰楽の場の提供を目指して池を新設したのである。風致協会は戦後も活動を続けた。風致地区は現在も機能している。私たちを取り巻く都市環境は、自ずとそこに存在しているのではなく、人々の意図や意識の積み重ねの結果としてあるということを感じるところがこの散歩道の見せ場であり、風致地区に指定されている石神井、善福寺のまちなのである。

早くも紙幅が尽きそうだ。『環境と公害』でこの散歩道を紹介するもう一つ別の、いや本来の意図を述べておこう。この散歩道は将来、大きく変貌する可能性が高い。何故なら、この散歩道はほぼそのまま「東京外かく環状道路」の計画ルートだからである。外環道路は、2007年4月に大深度地下方式への都市計画変更がなされた。これで一件落ち着いたというのは勿論、間違いである。石神井と善福寺の間にある青梅街道ICなどの各インターチェンジの周辺地域への環境影響のより詳細な検証(交通量増加の影響に加えて、地下水脈への影響など)、地下化される高速道路とは別に地上部に残る都市計画道路「外環ノ2」の取り扱いなどこれからしっかりと議論されなければならない課題が山積なのである。そして、その議論の際の現場はシミュレーションを実行するコンピューターの画面や都庁舎で開かれるPI会議にあるのではない。実際に散歩を通じて体感するまちこそが現場である。多くの方に現場を歩いてみて欲しい、そういう意図でこの散歩道を紹介した次第である。

